

派遣者番号	R2K07	氏名	安藤 幸恵
研究主題 —副主題—	巡回指導教員と在籍学級担任との連携について —連携に有効な手段、方策を探って—		
派遣先	帝京大学教職大学院	担当教官	藤井 靖史 前島 正明
所属	稲城市立向陽台小学校	所属長	鈴木 浩之

キーワード：巡回指導教員 連携 特別支援教室

1 研究の背景 (目的)・主題設定の理由等

本研究では、巡回指導教員と在籍学級担任との連携について、両者の意識や実態を調査し、子供の成長のため、より良い連携の構築に向けた有効な手段や方策を考え提案することを目的とする。

東京都は、「東京都特別支援教育推進計画第三次実施計画」(平成22年11月)及び「東京都発達障害教育推進計画」(平成28年2月)に基づき、平成28年度より情緒の通級指導学級に代えて、特別支援教室の設置を開始した。同時に、教員が巡回して指導・支援を行うことで、発達障害の可能性があると考えられる子供に対する在籍校での指導・支援の充実を図ることを公表した。また、平成30年度には、都内全公立小学校に特別支援教室が設置された。

巡回指導教員が、子供一人一人に十分な指導と支援を効果的に行うためには、在籍学級担任との緊密な連携・協働が不可欠である。東京都が示す「特別支援教室の導入ガイドライン」(平成30年改訂版)の中では、指導当日に情報交換を行うなどして連携が図れるようになった事例が報告されているが、実態を明らかにし、より良い連携のための方策を探ることとする。

2 研究の方法

本研究では、特別支援教室における巡回指導教員(以下、「巡回教員」と在籍学級担任(以下、「学担」との連携の中でも、「連携満足度」に焦点を当て、実態について調査研究を行い、研究結果から手段や方策について考察する。

(1) アンケート調査と目的

都内公立小学校4校の巡回教員と学担において、連携に関する実態を明らかにする。

「連携のための具体的な実践(例:巡回教員による指導参観、情報提供、校内研修会の有無など)」と「連携満足度(昨年度を振り返り、連携に満足していたか)」との関係を明らかにする。

(2) インタビュー調査と目的

アンケートに協力いただいた教員の中から通級指導教室の担当巡回教員3名と学担3名のペアを対象に、「アンケート結果についての率直な

感想」、「連携における効果的なポイント」、「連携のために避けた方が良いこと」について、半構造化面接にて明らかにする。

3 研究の結果と考察

(1) アンケート結果

満足度の要因となる実践を明らかにするため設定した調査項目のうち、一例ずつ示す。

(%は小数第一位を四捨五入。以下同様)

ア 学担の回答結果の例

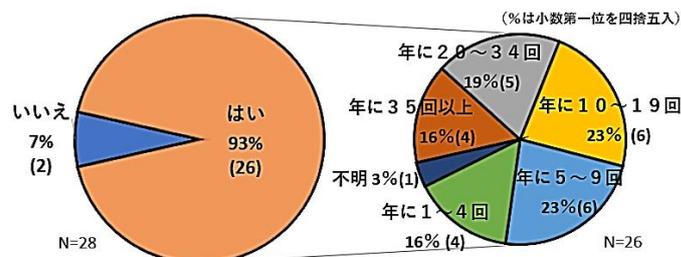


図1 巡回教員による在籍級での児童参観の有無とその回数

イ 巡回教員の回答結果の例

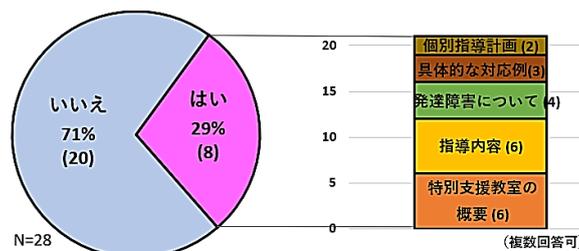


図2 特別支援教室についての研修会の有無とその内容

ウ 学担の連携満足度の回答結果

学担の連携満足度は、「とてもうまくいった」、「比較的うまくいった」が、9割超であった(表1)。学担側からでは、「連携満足度が高い」という結果になった。学担は総じて、巡回教員が連携のためにやっている実践に満足していると言える。

表1 学担から見た巡回教員との連携満足度

在籍学級担任から見て	とてもうまくいった 比較的うまくいった	どちらとも言えない	あまりうまくいかなかった ほとんどうまくいかなかった
	26人 (93%)	2人 (7%)	0人 (0%)

一方、巡回教員の連携満足度はバラつきがあ

った。「とても／比較的うまく行った」は約6割、「ほとんど／あまりうまくいかなかった」は約4割であった(表2)。巡回教員の回答の個人差も大きく、連携を「学級で子供がうまくいく手立てを共有できたか」として、満足度を低く回答したケースもあった。

また、カイ二乗検定の結果、連携満足度に影響を与える実践は明らかにならなかった。

表2 巡回教員から見た学担との連携満足度

巡回指導教員から見て	とてもうまくいった 比較的うまくいった	どちらとも言えない	あまりうまくいかなかった ほとんどうまくいかなかった
	16人 (57%)	2人 (7%)	10人 (36%)

アンケート結果からは、巡回教員の実践と満足度との関連が見いだせなかったため、インタビューを実施し、互いの相手への思いとより良い連携のための意見を調査することにした。

(2) インタビュー結果

アンケートでは連携に満足と答えた学担も、インタビューでは連携の課題を述べていたこともあり、結果は学担と巡回教員を分けることなく全体をまとめた。

各インタビュー内容は逐語記録に起こし、KJ法で分析を行った。その結果、「意識」、「コミュニケーション」、「専門性」の三点の大項目で、理論的飽和に達した。要約したのは計602文、そのうちの205文が「意識」(40%)、167文が「コミュニケーション」(33%)、138文が「専門性」(27%)であった。(項目に当てはまらず、「その他」にコード化したのは92文)

これ三点の大項目の前段階として、八観点の中項目がある。「意識」の四観点(①相手の仕事への理解不足、②協働性への理解と実現、③巡回教員がもつ固有の意識、④学担がもつ固有の意識)、「コミュニケーション」の二観点(①直接的関わりの重要性の認識、②コミュニケーションの弊害となる多忙感)、「専門性」の二観点(①専門性への課題、②般化への促進)である。これら八点の項目については、インタビューの代表的な語りを抽出してエピソード記述を行い、より良い連携のための手だてを探った。

(3) 提案

アンケート調査、インタビュー調査の結果から、以下の三点を両者のより良い連携のために提案する。

ア 「意識」改革のための提案

両者の相互理解の大切さや協働の重要性を明確に示すため、年度当初の管理職による理解啓発の講話を提案する。

講話は毎年必ず行い、校内の全教職員が集ま

る職員会議などで、制度や組織の中での両者の役割や連携の意味を確認する。

「意識」の四観点の中項目は全て両者の意識のズレから派生しており、特別支援教育の充実に向け、互いに十分な意識が根付くためにも管理職の講話が必要である。

イ 「コミュニケーション」を図りやすくするための提案

巡回指導日に、情報共有の時間を定刻で設定すること、また年度当初の職員会議などに位置付け、校内全教職員を対象とした特別支援教室に関する研修の実施を提案する。

インタビュー調査の結果から、両者とも多忙感に駆られる中でも、直接的な関わりが重要だと認識していることが分かった。実質的なコミュニケーションの時間と方法を確立することで、両者が確実に情報交換できるようにする。

また、特別支援教室の主任及びびチームによる研修を通して、巡回教員の仕事内容や巡回教員の言動の意図などに触れ、現状と要望を具体的に伝え合う。研修を通じて互いの専門性を確認し、組織全体の特別支援教育に対する理解向上と、指導の協力体制づくりを目指す。

ウ 「専門性」を高めるための提案

特別支援教育の指導経験の少ない教員が増加している実態を踏まえ、特別支援教育の経験を積んだ中堅以上の教員及び学担の経験のある教員を、特別支援教室に配置することを提案する。

経験豊富な巡回教員による充実したOJTにより、チーム全体の専門性の向上が見込まれる。また、学担経験のない巡回教員には、学級でできる支援と学級経営の視点などの研修が必要であり、同時に巡回教員として、子供の困り感に寄り添い適切に対応できるよう、学校内外の研修を通じて自己研鑽することが大事である。

4 今後の展望

今回は一つの市区町村での調査だったため、研究対象を拡げることで、地域ごとの特徴を明らかにしたり、連携の仕方を工夫したりできる可能性がある。今後も子供の成長に寄与できるよう、連携の改善策を検討し続けていきたい。